



ピッポ新聞

2007

10

No.224

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

神田古書市場 (2)

暗黙の駆け引き

市場に少し慣れてくると、ぼくにも回りを眺める余裕がでてきました。自分の価値判断で値段をつければよいだけです。一見かんたんなようですが、知れば知るほど、これがなかなか手強くて、そう単純なものではないことが解ってきました。

自分の欲しい本を同業の人と競争し、かつ、1円でも安く買いたいわけです。そのためには「どうすればよいか?」、この視点から市場を眺めると、確かに、そこにはある種の駆け引きの存在が垣間見えてきたのです。

決定的だったのは、市場で本を買うのではなく、売ることを経験したことでした。市場で本を買うのは古書店ですが、売るのも古書店なので、買っただけでなく、市場に本を出品して売ることができるとのことです。

ぼくも去年から今年にかけて4回、市場へ本を出品したのです。

きっかけは、たまたま知人から「主人の本を整理したいけど、ピッポさんやってくれない」と言われたことでした。知人のおもいは「廃品回収へ出すよりも、主人の本を誰かが再利用してくれれば」というものでした。

高校の日本史の先生だったご主人の蔵書を拝見すると、自分の関わった郷土史と教育関係の雑

誌や本が主でした。もう一人はご主人が大学のフランス文学の先生だったので、仏文の原書や美学・芸術論それと哲学・社会科学関係が目立ちました。

ぼくはこれらの蔵書を拝見していて、とても好奇心を覚えました。もしかしたら、古本屋の喜び(?)の一つはこんなところにあるのではないかと思っただけです。

だって、蔵書を拝見することはある意味で、その人の人生(仕事や趣味・世界観・価値観)を覗いているのだと思えるからです。

大学の先生の堅苦しい本ばかりの書棚の中に、ペーパーバックのちよいと軽めの恋愛小説(といってもフランス語の原書ですが)なんかを見つけると、何だかこちらもほっとして嬉しくなるのでした。

これらの本は、ぼくの専門外であるし、預かって自分で売ることなど自信もありません。第一今すでに古書置き場として借りている狭い部屋は本で溢れているし、ピッポの店(新刊の子どもの本屋)の通路にも古書は侵出している状態で、預かってゆっくり売っていく余裕などありません。

買うことと売ることの違い

そのとき、ふと考えたのは市場に出品してみようかということでした。

これまでは子どもの本を買うことだけを意識して市場を見ていたのです。でも買うのではなく、売るといことは、「1円でも安く買いたい」

になるわけです。当然、市場をこれまでとは逆な視点から見ることになりますね。

おもしろそうどうぞ！

預かってきた本の汚れを落としたり、蔵書印や書き込みがないかチェックし、ジャンル別にかんたんに仕分けし、時どきインターネットでその本がいくらぐらいで売られているかを眺めたりしながら段ボールへ詰めていきます。

埃まみれの雑誌を一冊一冊手にすると、戦後の早い時期は教育界はとても活気があったのだな、などと想像できますし、本の中には見返しに古本屋のシールなどが貼ってあるものもあり、何となくその本の履歴を思ったりするのですが、これが意外と楽しいのです。これもまた古本屋の楽しみなのだと思いました。ついつい真夜中過ぎまで、手を真つ黒にしながら作業を続けてしまいます。

これらを神田の古書会館へ送るのですが、フランス語の原書は「洋書会」へ、郷土史資料などは「東京資料会」へという具合にそれぞれちがった市へ出すことにしました。それぞれの市では、専門の役員がさらに売りやすい状態に分けて出品してくれます。ここでも、地方の古書店は「送料」というハンデがあるのです。東京近郊の古書店は自分で持ち込むようです。段ボール十数個となると結構な送料が掛かります。

出品して学んだこと

さて、この出品で解ったことがいくつか

あります。

最初の出品では、市場が終わった後、役員から電話がありました。「の本がぼつ(?)になっちゃけど、どうしますか?」「棒?」とは買い手がなくて、落札されなかったことだそうです。この場合は廃棄してもらおうか、送り返してもらおうかありません。返品だとまた送料が掛かります。それよりも廃棄(これも若干手数料をとられます)をお願いしました。

「止め」というのも知りました。これは予め売り手が「これ以下では売りませんよ」という設定ができるのです。そりゃ、そうですよね、自分が10万円の価値があると思つて出品した本が、2千円でしか落札されなかつたら泣くに泣けません。ですから「1万円」と止めを入れた場合、9千円の入札があつても、落札とはならないのです。

なぜ最低価額で落札は可能か

3度目に出品した時のことです。落札された中に、落札価格が2千10円というのがありました。前回書いたように、落札最低価額は2千円以上ですから、ギリギリの値段で落札されたことになりました。買い手にとっては理想的な落札価額です。実はこのことが、ぼくにいろいろのことを教えてくれたのです。

「このギリギリの最低値段をつけた人はどうしてこの値段をつけることができたのだらうか?」という疑問が湧いたのです。

考えてみれば簡単なことでした。ほかに競争相手がいなかったということです。

2千円でなく2千10円というのがおもしろいところで、ぼくはこれを落札者の愛嬌だと解釈しました。その後、何回か市場で2千円という最低落札価額も発見したのですが、ぼくに言わせればこれは愛嬌がないことになるのですが、こんなことはどうでもいいことでした。

落札者は、どうして競争相手がいないことを知ることができるかと言えば、これも至極簡単なことです。

封筒に入れ札があるかどうかを確認するだけよいのです。落札値段が書いてあるメモ紙は見ることはできませんが、封筒の中にメモ紙が入っているかどうかは外から見ただけで簡単にわかります。

そういえば、よく市場では封筒の入り口を吹いて封筒を膨らませている人がいます。あれは自分のメモ紙が入れにくいから、封筒の入り口を大きくしているのだとばかり思っていたのですが、もしかしたら入札者の数を調べているのかもしれないね。

自分がねらいを付けていた本が、だれも入札していなければ、最低の2千円と書いても落札できるといっわけですね。

でも、たいがいは自分が欲しい本は、ほかの人も欲しいのですから、競争相手がいないことなど滅多にありませんがね。

幸運にも、もしそついつ本を発見しても、そこであわてて入札してはいけません。

ぼくは思うのですが、行列のできるラーメン屋と同じように、人というものは他の

人が入札していることを知れば、自分も入札してみようかという心理が働くのではないでしようか？逆に、だれも入札していなければ自分もやめておこうとなるのではないでしようか。

この心理を逆を利用するのです。だれも入札していないのを確認したら、すぐ入札するのではなく、締め切りぎりぎりまで様子を見ていて、間際に入札価額「2千円」と書いたメモを封筒に入れるのです。締め切られたら、もはやだれも入札できないのですもの。

これも駆け引き？それともせいだけかしら？

とまあ、理論上(屁理屈かも?)ではこうなるのです。しかし、ぼくは一度も経験ありません。

だが、これを拡大解釈した考えは有効だと思えます。自分の欲しい本の入札状況を絶えず見極めて、応札者が少なければ低い価額設定でも落札できる可能性があります。

多い場合は諦めるか、どうしても落札したいときは、覚悟して価額を高めに設定すれば落札の可能性は高まります。

タイミングの見極めこそ大切

また、こんなこともありました！

やはり出品の一つが「棒？」になったと連絡があったのですが、その役員の方は「もしよかったら、次の市にだしてみますか？」と言ってくれたのです。こちらにとつ

ても好都合で、お願いしたところ、それが次の市で売れたのです。

このことから解ったことは、売るときも買うときも、タイミングがあるということ

です。売るタイミングとは、出品が少なく買い手が多い時であり、買うタイミングはこれとは逆で、出品が多くて、買う人が少ないときということになるでしようか？(需要供給のバランス)理屈ではね！

そこで状況分析をしてみました。

ぼくは月に一回しか市場に行きませんが、たしかに出品の多いときと少ないときがあります。それに人が少ないときと多いときも。しかし、この2つは反比例の関係にはないようです。残念なことに、傾向としては出品が多いときには、人も多いのです。当たり前ですよ。ぼくがあたかも大発見をしたように得意になって書いていますが、同業者は、こんなことは先刻ご承知なのでしよう。

でもね、ここで諦めたんじゃ、男じゃない！でなく、古本屋じゃない！

8月のお盆明けはどうだろうか？お盆休みで市場は2週間ぶりです。きつと出品は多いにちがいない。しかも、暑さ疲れで参加者は少ないだろうと、ぼくは踏んだのです。そこで、お盆休み明けの市場に出かけました。

ねらい通りでした。出品は通路まで溢れていました。人は少な目です。

これで、こどもの本の出品がたくさんあれば申し分ないのですが、例によってコミッ

クばかりが目立つだけで、子どもの本は期待通りとはいきませんでした。

ざつと、会場をまわってみました。1点をのぞいて興味もてる本はありません。それでもせっかくなので5点を選んで、入札することにしました。しかし、ここであわてて入札してはいけません。まずは様子を見ることがにしました。

さきほど気になった本を詳しく見ることにしました。子どもの百科事典など大型本ばかりがまとめられています。

中で一番目立つのは昭和30代に編まれた講談社の「こどもカラー百科全8巻」です。

でも、ぼくの興味をひいたのはこれではなく、その下の薄手で大判のソフトカバーの一塊りです。手に取ってみると、平凡社の「えほん百科」とあり、全十二巻が揃っていて、月報まで添えられています。この月報は変わっていて、イラストで埋めつくされているのです。本体は山本忠敬や寺島龍一など、後に絵本の世界で活躍する人たちのイラストがずらりです。

市場では、まれにこんなと出会えるから面白いのです。これはどうしても落札しなくっちゃ。

まだだれも入札していません。いつもはここであわてて入札して失敗するのです。あの「行列のできるラーメン屋」の逆理論の適用です。「行列」ができないように、まずぎりぎりまで様子を見ることにしました。

次号に続く

草薙に、ちび魔女大集合!

10月26日(金曜日)の夕方から夜にかけて草薙駅前の商店街に魔女やゾンビに扮した子どもたち(地元の子も会約200名ぐらい)が「Trick or treat お菓子くれなきゃ、いたずらしちゃうぞ」と言ってます。これはハロウィンを楽しもうと一昨年からはじまった催しです。

草薙の商店会の各お店でも協力して、参加している子どもにお菓子を配ります。ピッポも今年はお菓子を配ります。店内に「ハロウィン」や「魔女」の絵本コーナーを設けました。(それって便乗?その通り!)

これは10月からです。店内の装飾もハロウィン風になります。10月27日の土曜日午後2時から「ハロウィン」や「魔女」の絵本の読み聞かせ会も開催します。是非お出かけください。

ちびっ子魔女たちはとても可愛いですよ。そこでハロウィンにちなんだ絵本を紹介しましょう。

『ハロウィーンってなあに?』(クリステル・デモワノー・作 中島さおり・訳 1365円 主婦の友社)

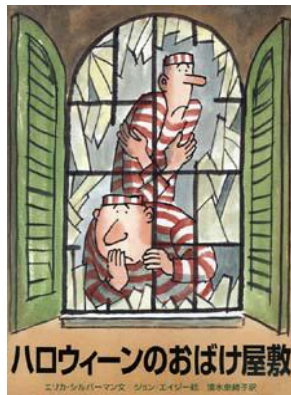
『ハロウィーンではなぜカボチャのランタンを灯すのか?』この絵本は、ハロウィンがどんなことを子ども向きに

説明したものです。それでランタンはね、



ジャックという嫌われ者が死んでから天国から地獄からも断られて、この世とあの世の境をさまよっているんだけど、その道を照らす明かりなんだってさ……。

『ハロウィーンのおばけ屋敷』(エリカ・シルバーマン・文 ジョン・エイジー・絵 清水奈緒子・訳 1575円 セーラー出版)



どうやら刑務所を逃げ出した2人組は、ハロウィーン館に迷い込んだようだ。狼男とそのこどもが吠える、おつきはかあさん吸血鬼とそ

『ハロウィナー』(デーヴ・ピルキー・作

かねはらみずと・訳 1575円 アスラン書房)



胸長で足の短い犬オスカーは、仲間から「ウィナー」とからかわれています。ハロウィーンのお菓子も足が短いため、到着が遅れてしまい、だれからもお菓子をもらえませんでした。ところが

仲間はその帰り化け物に脅かされ、池に飛び込んで逃げました。オスカーはお化けの正体を見破ると、みんなをたすけたのです。そこでみんなから「ウィナー」(勝者)とたたえられるのでした……。

編集後記

近所の幼稚園の前を通ったから、帰りの時間だったから、お迎えのお母さんにたちに出会った。彼女たちはみんな胸に名札を吊り下げていた。これは関係者であることを幼稚園が認識するためだ。おかしな感じがした。外部かの不審者のチェックのためだろうが、やっぱり大人に名札を付けさせるのは異常だ。外からの不審者のチェックはできたとしても、内部の不審者はどうすればよいのだろうか?また教師の淫行が報じられていた。安部首相の政権投げだしもそうだが、この国は何かしら狂いだしたようだ。